

「振り返ってよ」 ——『燃ゆる女の肖像』の音楽と幻影に見る回想のドラマトゥルギー

辻 佐保子

0. はじめに

『燃ゆる女の肖像』（*Portrait de la jeune fille en feu*, 2019）は、18世紀フランスを舞台に、画家マリアンヌが伯爵家の娘エロイズの見合い用肖像画を描く過程で育まれた愛の記憶が、三つの回想から描かれる。*New York Times* の A・O・スコットは、「メインのナラティブを粹取る序盤と終盤の簡潔なシークエンスを除いて一私たちの見るものは大体、基本的には、マリアンヌの視点から見たフラッシュバックであり一映画は決して屋敷とその周辺から離れない」（Scott 2019）と本作をまとめている。

しかし、本作の構成はスコットの概観よりも込み入っている。まず、現在の時制に属するマリアンヌと回想の関係は一定ではない。最初の回想は、マリアンヌが絵画教室で自作《燃ゆる女の肖像》に引き合わされたことをきっかけに突然始まる。エロイズや女中のソフィ、伯爵夫人と交流し、肖像画を制作する間、マリアンヌの語り手としての姿や声が挟まれるわけではない。しかし終盤を飾る二つの回想—絵画の展示と音楽堂での演奏—はマリアンヌのナレーションで始まる。要はマリアンヌの「振り返り」が序盤と終盤とで変質しているのだ。最初の回想が始まってから再び絵画教室へ戻るまでの間に、何か回想に変化をもたらすことは生じていたのだろうか。そして、回想が静的なようでいて実は動的に変遷しているとした時、作品の全体像はいかなるものとして捉えられるだろうか。本稿では、最初の回想において転機となる合唱と、後半部に登場する花嫁衣装で立ち尽くすエロイズのイメージ、さらには幕切れを飾る「夏」に着目し、回想のドラマトゥルギーとの関係を論じる。

The Guardian や *TIME* の批評で「リアリズム」（realism）という言葉が用いられているように（Bradshaw 2019, Zacharek 2019）、本作では基本的に、マリアンヌやエロイズたちの日常が淡々と描かれる。その中において、合唱と花嫁衣装のイメージは異彩を放っている。ソフィの中絶を依頼するため、マリアンヌとエロイズ、ソフィが足を運んだ祭りで、焚き火を囲む女性たちが合唱を始める（01:16:15）。監督セリーヌ・シアマの盟友パラ・ワンが作曲したこの合唱で、女性たちは手をリズムカルに叩きながら“Non Possunt Fugere”と繰り返す、幾重にも声を重ねていく。ところが荘厳なコードに入ると映像は昼間に変わり、音源とイメージの連関は引き剥がされる（01:18:26）。他方、三回現れる花嫁衣装のイメージのうち、最初の二回はマリアンヌの見る幻影として登場し（01:22:01、01:33:38）、最後のイメージもどこか生气に乏しく幽霊的に見える（01:51:35）。合唱やイメージについて、先行する言説では、マリアンヌとエロイズとの間の切迫感を帯びた親密さを描写する働きが指摘されてきた（Johnston 2021 10-12, Rao 2020, Scott 2019）。確かに、リアリスティックな表象からの逸脱である合唱も花嫁衣装のイメージも、浜辺の岩陰で身を隠すように交わすキスや情事の前後、後ろ髪引かれながらの別離など、マリアンヌとエロイズが互いに求め合う時に確認される。他方、映画終盤を飾るヴィヴァルディによる《四季》の「夏」第三楽章は、音楽に聞き入り感情を昂らせるエロイズの姿をマリアンヌが見つめる場面と理解されており、基本的に過去の時制に属する音であることは自明とされてきた（Felperin 2019）。しかし、マリアンヌの回想を成立させるドラマトゥルギーという切り口から見た時、クライマックスの「夏」は合唱や花嫁衣装のイメージから大きく隔絶されたものではないことが分かる。では、回想のドラマトゥルギーにおける音楽やイメージの働きをいかにして論じていくか。この問題に対して本稿では、劇中に頻出する「振り返り」のモチーフに着目したい。

「振り返り」のモチーフには、たとえば、画家と身分を明かせずに肖像画を描く際にマリアンヌが記憶をめくらせることも該当する（00:24:02）。エロイズがマリアンヌに思い出を聞かせるよう促すことも含められ

るだろう (00:37:41)。また、身体の向きを変え、視線を異なる方向へ移す身ぶりとしての「振り返り」も見すごせない。後に詳述する通り、合唱も花嫁衣装のイメージも、身体行為としての「振り返り」を伴っている。さらに、マリアンヌとエロイズ、ソフィーとで、オルフェが「振り返り」ユリディスを見る逸話について議論を交わす場面もある (01:13:30)。想起のレベルでも身体行為のレベルでも「振り返り」のモチーフが過去のエピソードに散りばめられ、それを現在の時制に属するマリアンヌが「振り返り」語るという構造が看取されるのだ。とはいえ、先に述べたように、一度目の回想は現在に生きるマリアンヌによる「振り返り」であるとは強調されない。本稿では、逸脱的な合唱と花嫁衣装のイメージこそが「振り返り」の二重構造を仄かに立ち上がらせると解釈する。

まず島での日々における「振り返り」を整理し、エロイズと親交を深め、愛を交わすに従い、徐々にマリアンヌが「振り返り」を見せていくようになることを論じる。次に、合唱と花嫁衣装のイメージについて、現在の時制に生きるマリアンヌによる「振り返り」を表出させる契機となっていることを指摘する。そして、クライマックスを飾る「夏」も過去の時制に属する音であるのみならず、回想の位相で響く音としても解釈しうることを述べる。以上の議論を通じて、『燃ゆる女の肖像』の回想のドラマトゥルギーを明らかにしたい。

1. 一回目の回想における「振り返り」とマリアンヌの変化

本節では、島での日々が綴られる最初の回想で、身体および想起のレベルでの「振り返り」がどのように現れ、そこで何が表現されているかを、特にマリアンヌに着目して論じる。そして転機として位置づけられる祭りの夜を境に、マリアンヌによる「振り返り」の性質が変化していることを明らかにする。

ここからは、祭りの夜までの間で「振り返り」がどのように描かれているかを確認する。まず指摘できるのは、肖像画を描く行為が既に「振り返り」を要請していたことだ。画家であることを隠してエロイズと接するがために、マリアンヌはモデル不在で肖像画を描かなければならない。劇中、マリアンヌが筆を止め、目を瞑り、思い出す様子が幾度か登場する (00:29:58)。けれどもエロイズはマリアンヌの「振り返り」に基づく肖像画を一瞥すると、規範に縛られて自分自身から乖離していると拒絶する (00:50:20)。マリアンヌは反発するものの、結局肖像画の顔を自らの手で拭い取る (00:51:09)。一連の展開は、画家としての作業の中で行われた「振り返り」が、不完全なものとして受けとめられたと概観できるだろう。

エロイズとの関係性の中でも、マリアンヌの「振り返り」は未達のものとして表現されている。エロイズが音楽について話すようマリアンヌに促す場面を例に挙げたい (00:37:41)。マリアンヌは一瞬目を伏せて沈黙した後、苦笑いを浮かべつつ「音楽は話せません」と返す。部屋にあるハーブシコードでマリアンヌは「夏」の演奏を試みるものの、途中で音が取れなくなり頓挫する (00:39:42)。マリアンヌは二度、音楽を「振り返り」損ねていると言えるだろう。また、初めて一人で散歩に出たエロイズが、帰宅後、マリアンヌに寂しさを訴える場面も注目に値する (00:42:27)。この時、マリアンヌは絵の具で汚れた手を隠すようにエロイズから背を向け、視線だけ寄越している (00:42:13)。そこに不在を惜しむ言葉がかけられ、マリアンヌは咄嗟にエロイズに対して完全に背を向け、胸打たれたような表情を浮かべる (00:42:32)。しかしマリアンヌはエロイズに返答せず、体の向きを変えて再び見やることもせず、立ち去る (00:42:38)。マリアンヌは、自身を求めるエロイズに「振り返り」応じることができない。マリアンヌとエロイズが新たな肖像画の製作を開始した後にも、完遂されない「振り返り」がある。素人療法でソフィの中絶を試みる中、マリアンヌに中絶の経験があることを知ったエロイズは、愛し合った時の記憶を「話して」と促す (00:59:38)。マリアンヌは「説明は難しい」とこぼすが、エロイズは「どんな気持ち？」と重ねて問い、「振り返り」を待つ (00:59:56)。言葉を探るよう薄く口を開けるマリアンヌだが、疲弊したソフィが倒れたために会話は中断する (01:00:11)。

祭りの夜以前を整理すると、身体行為においても想起においても「振り返り」に至らない場面が複数見られる。「振り返り」の失敗であるこれらの描写は、親密になってはいるものの欲望を交わしあうまでには至っていないという二人の置かれたもどかしさと重なっているようだ。「振り返り」の未遂からは、一步步関係を変化させていく最中の宙吊り状態や、それによる切迫感が表現されている。

だが祭りの夜を境に、マリアンヌは「振り返り」を見せていく。浜辺へ散歩に出かけた二人が洞穴でキスを

する場面では、一足先に去るエロイーズをマリアンヌは身体の向きを変え、「振り返り」、見つめる (01:19:47)。また、その夜に部屋へ戻ったマリアンヌはエロイーズと抱擁し、再び唇を重ねるのだが、その際エロイーズはマリアンヌの向きを変え、背中越しにキスをする体勢を取らせる (01:23:13)。この姿勢は、祭りで購入した薬草でトリップした時の情事でも反復される (01:32:51)。さらにソフィの中絶場面でも、体ごと直視を避けるマリアンヌをエロイーズが「見るんです」と嗜め、振り向かせている (01:26:55)。想起の「振り返り」は、マリアンヌの滞在最終夜に見られる。マリアンヌとエロイーズは向かい合って寝転びながら、ともに過ごした時間を反芻する (01:44:24)。祭りの夜以前と異なり、マリアンヌはこの時、初めてエロイーズの笑顔を見た時などを「振り返り」、言葉を紡ぐことができている (01:46:51)。そしていよいよ屋敷を立つという時、マリアンヌはエロイーズから「振り返ってよ」と呼びかけられる (01:56:25)。声に応じて「振り返り」、声の方向を見つめてからマリアンヌは改めて去っていくのだ (01:51:29)。祭り以降のマリアンヌを整理すると、身体行為としても想起としても「振り返り」ができるようになっていることがわかる。

マリアンヌの「振り返り」がエロイーズとの関係をめぐって現れる以上、エロイーズが変化に関与していると考えられる。実際、エロイーズがマリアンヌに思い出すよう促すやりとりは複数回見られる。体勢を変えて背中越しにキスをさせ、中絶を「見なさい」と命じるのもエロイーズである。最後の夜に、思い出のひとつとして「キスをしたいと初めて思った時のこと」と口走ったエロイーズに、マリアンヌは「いつです?」と聞くが、エロイーズは「当てて」と投げ返す (01:46:10)。予想を外したマリアンヌは正解を求めるが、逆にエロイーズから初めてキスをしたいと思った時を話すよう促される (01:46:26)。ここからは、エロイーズがマリアンヌに島での日々を反芻させていると言える。

最初の回想では、エロイーズに触発されて「振り返ってよ」という呼びかけにマリアンヌが応じるようになる過程が描かれている。そして「振り返り」をめぐるマリアンヌとエロイーズの関係は、エロイーズによるオルフェ神話の解釈に重ねられる。祭りへ出向く直前に、マリアンヌとエロイーズ、ソフィはオルフェがユリディスの方を振り返った意味を議論する (01:13:30)。この時、エロイーズは「ユリディスが振り返って「私を見て」と言ったのでは」と、ユリディスに出来事のきっかけを移している (01:14:23)。オルフェが一方向的にユリディスをまなざすのとは異なる、相互的な関係がエロイーズの解釈からは浮かび上がる。この点を踏まえると、「振り返ってよ」と呼びかけ、その声に応えるように「振り返り」を獲得していくという描写には、相互的な愛の結実を希求するマリアンヌとエロイーズの姿を重ねることができるのだ。

2. 滲み出る語り手としてのマリアンヌ

ここまでの議論で明らかにした「振り返り」のプロセスは、さらに、現在の時制に属するマリアンヌの回想によって粹取られている。序盤で述べたように、一度目の回想は語り手マリアンヌから離れて淡々と過去の出来事が綴られているように見える。けれども注意深く検討すると、この基本方針からの逸脱が祭りの夜以降に看取される。それは、合唱と花嫁衣装のエロイーズのイメージである。本節では、現在の時制に属するマリアンヌによる「振り返り」が仄かに表出していることを、合唱と花嫁衣装のイメージの分析から明らかにする。まず三回登場するイメージから議論し、次いで合唱がマリアンヌによる回想の語りが現れるきっかけとして位置づけられることを述べる。

エロイーズのイメージの中で、一回目と二回目は明らかに幻影として示されているのに対し、三回目は足早に去ろうとするマリアンヌを引き止める生きたエロイーズのように見える。しかし、三回目のエロイーズは本当に生身のエロイーズなのか。この場面の音と光に着目すると、マリアンヌがドアへ駆け降りていく足音は高く鳴っているのに、マリアンヌを追いかけているはずの足音が重なっておらず、突然「振り返ってよ」と言葉が投げられることに気づかされる (01:51:15)。また、そこに映るエロイーズのイメージはドアが閉まって闇に沈む一瞬手前のものであり、マリアンヌの不在は明白である。こうして三回目のイメージにも、一回目と二回目に通じる幻影としての性質を見出すことができる。「透明な」カメラで切り取ったかのように展開する島での日々で、リアリティから逸脱した表象が挟まれることにより、何が表現されているのか。

一度目のイメージは、浜辺でのキスの後に置かれている。夜になり、部屋へ戻ろうとするマリアンヌが気配

を察して振り向くと、エロイーズのイメージが付んでいる (01:22:01)。直立不動のエロイーズのみが一瞬映ることから、過去の時制に属するマリアンヌの視界が表現されているように見える。しかし、すぐにマリアンヌの後ろ姿も画面に入るため、視点ショットでないことがわかる (01:22:06)。二回目も、夜に部屋へ向かう寝巻き姿のマリアンヌの背後にイメージがぼんやりと浮かび上がり、マリアンヌが「振り返り」見つめる間に消える (01:33:38)。そして三回目では、去りゆくマリアンヌが聞いたはずの音が聞こえず、見るはずのない闇に沈む一瞬手前のイメージが示されている。徐々に、花嫁衣装のエロイーズは過去の時制に生きるマリアンヌの認知の外へズレている。これらのイメージがどの位相にあるのかを考えた時、現在の時制に属するマリアンヌが「振り返り」、語る位相と捉えることもできるだろう。過去の時制に生きるエロイーズの視点ショットでないことが明らかになる瞬間に、現在の時制から描写される光景としてイメージはその性質を変え、不透明な語り手マリアンヌが滲み出すのだ。

それにしてもなぜ、マリアンヌとエロイーズが浜辺で初めてキスを交わした後から、マリアンヌの語りが滲み出ているのだろうか。契機として祭りの夜の合唱を挙げたい。焚き火の周りに集った女性たちが音や響きを確認するように声を発し、音階を上げながら歌い手が緩やかに増えていく (01:16:05)。そしていくつかのグループに分かれ、それぞれのリズムで“Non Possunt Fugere”という歌詞を繰り返す。音は徐々に高くなり、33 回目の“Non Possunt Fugere”とともにオブリガートが加わり、歌は高みを目指す (01:17:35)。50 回歌われた後にしばしの無音を経て、コードに入る (01:18:15)。そして荘厳な雰囲気“Nos Resurgemus”と 3 回歌われて合唱は終了する。

序盤で疑問を呈したように、この合唱はコードで画面が替わり、太陽の下で散歩するマリアンヌとエロイーズの映像の背後でも響く (01:18:26)。批評では本作における音楽について、「リアリティ」の範疇で理解されてきた (Kermode 2020)。マリアンヌがハープシコードで「夏」を弾く時はこの理解が妥当と考えられる。他方、合唱は映像とのリンクが途中で切れており、コードでは音の出どころが明らかに画面内に存在しない。それにより、当初は過去に属するものとされていた歌が、現在からの「振り返り」へ位相がズレたことが音とイメージの乖離から表されていると解釈できる。

合唱で歌詞が始まってから 28 回目までは、手拍子し歌う女性たちの姿が映される。その後の 4 回は、画面左手に体ごと向いていたマリアンヌが正面に向くショットと重なっている (01:17:28)。画面内に歌い手は映っていないが、向き直りによりマリアンヌが歌に反応していると窺える。この時点での歌は過去の時制に属しているが、ここから様相が変わる。33 回目から画面はエロイーズに切り替わるのだが、この時に高音のオブリガートが挟まる。強迫的に繰り返される歌詞の隙間を縫うオブリガートを誰が歌っているかは、映像からはわからない。劇の流れに即せば、祭りに集った女性たちのうちの誰かであり、その意味で過去の時制の音である。けれども同時に、エロイーズが映るショット、すなわちマリアンヌの視点と重なるショットに切り替わった瞬間から始まり、その後二人が相手を見つめるショットが交互に置かれる間も響くオブリガートは、欲望が双方の間で跳ね返り飛翔した瞬間を劇的に描き出している。ここに、現在のマリアンヌの語りの発露を見ることができないか。

合唱で語り手マリアンヌの「振り返り」が表出するという解釈は突飛かもしれない。しかしコードを検討すると、歌はますます祭りの夜という時空間の規定から飛躍していることが分かる。“Non Possunt Fugere”が 50 回繰り返された後、しばし休拍が挟まれる。マリアンヌを見つめたまま焚き火から離れたエロイーズのドレスに火が移っている (01:18:05)。エロイーズが火に気づいて裾に目をやり、またマリアンヌを見つめるアクションの間、歌は止まっている (01:18:09)。半身振り返るような動作とともにエロイーズを見るマリアンヌのショットへ替わってようやく、コードが始まる (01:18:05)。ここでも歌い手は画面には映らない。見つめるマリアンヌ、火を消火しようと駆け寄る女性二人、引き倒されるエロイーズ、急いで駆け寄り手を差し伸べるマリアンヌと、休拍以前より人が慌ただしく動き回る (01:18:15)。歌が女性たちと厳密に紐づけられるとしたら、ボヤ騒ぎが起きた段階で多少歌声に状況への気づきや動揺が混じってもおかしくないだろう。それでも歌は小さな騒動などお構いなしに荘厳な音を響かせる。さらにマリアンヌの手をエロイーズが取るや否や、画面は昼間に変わり、浜辺への道を手に手を取って進む二人に変わる (01:18:26)。その間もコードは肅々

と続く。しかと繋いだ手から連想のように切り替わる映像、変わらず“Nos Resurgemus”と響く合唱。夜の祭りに集った女性たちから始まる合唱は、コードが開始した時には現在の時制のマリアンヌによる「振り返り」の中の音としても鳴り響く。

以上のように、語り手マリアンヌが不透明なものとして前景化する契機として合唱が機能していると考えられる。そして前節の分析と結び合わせると、この合唱を境にエロイズから触発される「振り返り」にマリアンヌは応えていくのだが、そこには時折幻影が差し込まれる。祭りの夜を境にして、過去の時制と現在の時制にまたがる両義的な作品世界が提示されるようになる。こうして島での日々の回想を終えたマリアンヌは、今度は自らの語りで以てエロイズとの「再会」の回想を漕ぎ出していくのだ。

3. 「振り返り」としての「夏」、「振り返り」の呼び声としての「夏」——結びにかえて

ここまでを踏まえることで、締めくくりで流れる「夏」第三楽章からも、現在の時制に生きるマリアンヌの回想との結びつきを見出せるようになる。二回目の「夏」が流れる時、そのほとんどの時間は、堪えきれない涙を流しつつも抑えきれない喜びを口元に浮かべて聞き入るエロイズの表情をカットなしで捉えることに費やされる (01:55:57)。The Hollywood Reporter のレスリー・フェルペリンの批評に見られるように、この時のエロイズがマリアンヌとの愛の記憶を想起し、それゆえに感情を昂らせているという理解が基本となっている (Felperin 2019)。その一方で、エロイズの想起を触発する音楽の位置についてはあまり語られてこなかった。もちろん音楽堂が舞台となっているため、「夏」の音源など疑問の余地はないように思われる。しかし「夏」をめぐる表象に着目すると、音に曖昧さが聞き取れることに気づかされる。

「夏」の曖昧さとは、まず、現在のマリアンヌによる「私を見なかった」というナレーションが挟まり、楽器を構える音すら聞こえない静寂の瞬間が訪れた後、突然音楽が始まることに起因している (01:55:47)。演奏の間、楽団が映されることはなく、音楽は画面外から響く。ここで、祭りの夜の合唱を思い出したい。合唱では休止の後のコードはマリアンヌの顔のショットと共に始まり、そこから現在の時制に属するマリアンヌの「振り返り」が表出するという解釈を提示した。音楽堂での「夏」も、最初の4小節はマリアンヌの顔がアップで映されている。リアリティからはみ出す静寂と大写しになるマリアンヌの顔を経ることで、音楽堂で響く音であると同時に、回想するマリアンヌが響かせている音としても「夏」を聞くことができる。

「夏」の時制が両義的という見解を提示するにあたり、曲の結部も注目に値する。マリアンヌからエロイズへ画面が切り替わった後、エロイズの反応がもたら捉えられることは先述の通りである。しかし最後の一言の途中で、画面は前触れなく暗闇となる (01:58:22)。これにより、断定しがたい曖昧さを有したものとして「夏」を締めくくることが可能となる。演奏が終わった後のエロイズや音楽堂の様子が映されていたら、「夏」の音の両義性は霧消し、過去の時制に紐づけられることになるだろう。しかし最後の一言が暗闇の中で響くことにより、音楽堂での演奏が終わりに到達したことが示されるとともに、回想として響かせてきた音楽が完遂したことも示されることとなる。思えば、最初の回想で「夏」を演奏する時にマリアンヌはうまく音が取れず、途中で演奏を止めていた (00:39:42)。それに対し、二度目の「夏」が現在と過去にまたがる音として響く時、マリアンヌはエロイズからの「振り返ってよ」という呼びかけがなされずとも、失敗することなく音楽の「振り返り」を成し遂げたこととなる。

この「振り返り」の完遂が、音楽を聞き入ってマリアンヌに気づかないエロイズを、マリアンヌが見届ける形で描かれていることも興味深い。終盤の二つの回想のうち、前半の絵画展示のエピソードでは引き続き呼びかけを聞き取ることができる。エロイズが描かれた肖像画には、密やかに「28」のサインが書き込まれている (01:53:55)。いつマリアンヌに届くとも知れないにもかかわらず、愛のメッセージをエロイズは送っていたのだ。声なき「振り返ってよ」に触発され、絵に対峙したマリアンヌは記憶を噛み締めるように微笑む (01:54:08)。他方、音楽堂でのエロイズはマリアンヌに「振り返ってよ」と呼びかけているというより、自ら追憶に身を任せている。むしろ、オーケストラの音が媒介となり、マリアンヌがエロイズに「振り返ってよ」と呼びかけているようだ。「振り返ってよ」と呼びかけるエロイズに応えるマリアンヌという関係は、読み替えの上で見出されたオルフェとユリディスの相互的な関係に重ねられることは先述の通りである。しか

し、両者の役割は交換されることはなく固定されていた。それに対して、「夏」を通じてマリアンヌがエロイズに「振り返ってよ」と呼びかけていたと解釈すると、「振り返り」をめぐる呼びかけと応答の役割は、より相互的なものへと変化したと言えるだろう。

ここまで、『燃ゆる女の肖像』における音楽および幻影のイメージに着目し、回想内に頻出する「振り返り」のイメージとの関係を解き明かすことで、本作における回想のドラマツルギーが過去と現在双方におけるマリアンヌの変化を基軸に構成されていることが明らかになった。過去の時制においてマリアンヌは、エロイズの呼びかけに応じて「振り返り」を示すようになっていく。そして現在の時制のマリアンヌは、回想内のマリアンヌ自身の変化に対応するように、「振り返り」の語り口を滲ませていくようになる。そして終盤を飾る二つの「再会」にて、「28」と「夏」を呼び声に、マリアンヌとエロイズの間にはともに振り返り・振り返らせるという相互性が見出されるようになるのだ。

引用文献

『燃ゆる女の肖像』(*Portrait de la Jeune Fille en Feu*) セリーヌ・シアマ監督、GAGA、2021。

- Bradshaw, Peter. “*Portrait of a Lady on Fire* Review – Burning Desires and Flashes of Hitchcock,” *The Guardian*. 20 May 2019. <https://www.theguardian.com/film/2019/may/20/portrait-of-a-lady-on-fire-review-celine-sciamma> 28 Jun 2022.
- Felperin, Leslie. “‘*Portrait of a Lady on Fire*’ (‘*Portrait de la Jeune Fille en Feu*’) : Film Review,” *The Hollywood Reporter*. 19 May 2019. <https://www.hollywoodreporter.com/movies/movie-reviews/portrait-a-lady-fire-review-1212091/>. Accessed. 28 Jun 2022.
- Kermode, Mark. “‘*Portrait of a Lady on Fire*’ Review – Mesmerised by the Female Gaze,” *The Guardian*. 1 Mar 2020. <https://www.theguardian.com/film/2020/mar/01/portrait-of-a-lady-on-fire-review-celine-sciamma>. Accessed. 28 Jun 2022.
- Johnston, Cristina. “The Queer Circulation of Objects in the Films of Céline Sciamma,” *French Screen Studies*. 2021. pp.1-17. DOI: 10.1080/26438941.2021.1956717.
- Rao, Sonia. “‘*Portrait of a Lady on Fire*’ Doesn’t Need a Musical Score to Tell How to Feel,” *ProQuest*, Feb 20, 2020, <https://www.proquest.com/blogs-podcasts-websites/portrait-lady-on-fire-doesn-t-need-musical-score/docview/2359092394/se-2?accountid=14891>. Accessed. 28 Jun 2022.
- Scott, A. O. “Chateau Named Desire: Review.” *New York Times*, Dec 06, 2019. *ProQuest*, <https://www.proquest.com/newspapers/chateau-named-desire/docview/2322039054/se-2?accountid=14891>. Accessed. 28 Jun 2022.
- Zacharek, Stephanie. “*Portrait of a Lady on Fire* Is a Radiantly Sensual 18th-Century Story That Resonates Today,” *TIME*. 6 Dec 2019. <https://time.com/5594323/portrait-of-a-lady-on-fire-review/> Accessed. 28 Jun 2022.

追記

本稿は、2022年1月29日に開催されたRILAS研究部門「イメージ文化史」主催ワークショップ「私たちは立ち上がる——『燃ゆる女の肖像』における生の取り戻し」内で発表した「私を振り返って——『燃ゆる女の肖像』における想起と音楽」の内容に加筆修正を施し、題目変更を行ったものである。